

【書評】

關 浩和著『情報リテラシーと社会科授業の改善』

(明治図書、2007年刊)

馬 野 範 雄

(大阪教育大学)

ほぼ全ての小・中学校で、パソコンルームが設置され、情報リテラシーを活用した社会科授業が各地で実践されている。しかし、中にはパソコンから情報を見つけてプリントアウトし、模造紙に貼るだけの授業が展開されるケースも見られる。情報リテラシーを活用した社会科学習とはいかなるものなのか、教育現場では未だ明確に示されていない。

そんな中、關 浩和氏による『情報リテラシーと社会科授業の改善』が発刊された。本書は情報リテラシーを活用した豊富な社会科授業を具体的な事例として紹介しながら、情報リテラシーを活用した授業の意義や社会科学習における効果的な活用方法をわかりやすく紹介している。

本書の構成は、次のとおりである。

プロローグ

- 第1章 情報リテラシーと社会科授業の役割
- 第2章 魅力的な社会科授業を創る
- 第3章 情報リテラシーの向上をめざす社会科授業
- 第4章 社会科授業の改善につなげる評価

エピローグ

第1章では、情報リテラシーを「情報手段の特性と理解、目的に応じて、適切な情報の選択、収集、判断、評価、発信などの能力に加えて、情報および情報手段・情報技術の役割や影響に対する理解など、情報を扱うために広範囲な知識と能力を統合的にとらえた概念である」ととらえ、「情報収集」「情報発信」「情報交流」という三つの視点から、社会科授業の役割を明確にしている。

第2章では、まず、今日よく見られる「わからない」社会科授業の問題点を明らかにし、魅力的な授業には、教師の人間の魅力と教材的魅力が必要であることを明示している。そして、「教材の

意義」「教材開発の楽しさ」「発問と板書の関係」「指向性のある学習活動」という四つの教材研究の要素をもとに、魅力的な社会科授業像を具体的な事例を示しながら提案している。

第3章では、情報リテラシーの向上をめざす社会科授業のポイントとして、次の10点を示して、詳細に解説している。

- ① 学習は「意識」することから始まる。
- ② 学力の本質は情報処理活動をより強力に行う総合的な力である。
- ③ 情報やデータは詳細に分析し、地図や図表に関連づける。
- ④ 子どもの思考を支援するための情報カード（文字と画像）を活用する。
- ⑤ 社会的事象は一つの空間を切り取って考える（ゾーニングの活用）。
- ⑥ バラバラな情報はウェッピング法やロジックツリーを活用して分類・整理する。
- ⑦ 観点を明確にして二つ以上の情報を比較して考える。
- ⑧ コンピュータは、その特性を知り、目的に応じて使い分ける。
- ⑨ 部分の積み上げで全体を理解するだけでなく、俯瞰して全体を把握して部分を理解する。
- ⑩ 他者ほどすばらしい教科書はない。

この10のポイントを解説するために、3年「地域の地図づくり」、4年「特色ある地域の暮らし」、5年「日本の農業」など、6実践を具体的に紹介している。さらに、情報リテラシーの向上をめざす学習モデルを提示し、5年「生活と情報」「日本の工業生産」6年「明治の世の中」の実践を詳細に示し、授業改善の方向性を明らかにしている。

社会科教育法の指導者や小・中学校の実践者には是非とも読んでいただきたい一冊である。